

ひとつの雑布バケツへジャブジャブ、はやくしないと貯水ビンが一杯になってしまうぞ、こんどはバケツがないから雨量計ごとかついでこなければならんぞ。やっとのことで測定終了、総合計約135mm。

恐る恐るの上甲板へ、雨量計の貯水ビンをのぞけば、まだあふれるまでにはいっていない。かえりにブリッジに寄って、なんでこんな雨の中走るんだい。レーダーを見てみよう、当直士官とレーダーをのぞけば、船用レーダーに雨域がはっきり見えるではないか、それも東西にのびた雨域の中心近くに船は進んでいて、然もこの雨域は東から西へ進んでいるではないか。これじゃ午

後になっても雨は止まないよ。その内雷様がおへそならぬ火薬庫へ落ちるぜ。いくら大雨でも船が沈むことはないが、火薬庫は恐ろしいよ。

船は北へ進路をかえ、ようやく10時すぎこの雨域から脱出、昨夜のボルネオの山火事といい、赤道前線の仕業であった。

海上で大雨にあらうことはしばしばあるが、船は雨や雪だけでたやすく沈むことはないが、それに伴う暴風、高波、視界不良、着水、などが遭難の原因となる。その雨の原因をよく知って、危険な海域からさけるようにしなければならぬ。

地方支部主催シンポジウム

講演企画委員会

49年度の地方主催シンポジウムは東北支部の要望にひきつづいて北海道支部の申し出があったので、その旨常任理事会に報告し了承を得た。日程、講師、内容の詳細は、追って報告する。各テーマについての話題提供の申し出があったら当委員会に連絡して頂きたい。

(I) 雨量予報の現状と問題点

1. 日 時 7月
2. 場 所 仙台
3. 方 式 講演会形式
4. 講 師 野口和則、酒井一、山岸米二郎、立平良三、駒林誠
5. 内 容 雨量予報技術を体系的に考えてゆきたい。予報時間1～6時間の短時間予報と12～24時間ぐらの短期予報に分けて考える。短時間予報はメソスケールの現象とみられるが、ここではレーダーの利用と地域観測網などの実況値の利用をコンピューター処理に関連させて述べる。

つぎの、短期予報は主としてシノプティックスケールの現象であり、確率的予報の対象であろうが、平均値の予報としてはシノプティックの数値予報に、そして

maximumの予報としてはポテンシャル予報について述べたい。

これらに関連して議論を深めるため

- 1) 地形効果の扱い
- 2) 雲物理効果の入れ方
- 3) 雲力学(対流のパラメタリゼーション)

についての話題を提供し、出来たら雨予報に係るメソスケールの数値予報についての将来構想と今後の雨量予報技術についての総合討論をつけ加える予定である。

(II) 冬の低気圧*

1. 日 時 12月上旬頃(1974年)**
2. 場 所 札幌
3. 方 式 講演会形式(半日)+オリジナル形式
4. 講 師 未定***

* 理論、災害、解析のいずれでもよくラージスケールの大低気圧からメソの小低気圧までを含む

** 支部と管区共催の研究会(2日)の前後一日をとる。

*** 支部は、気象研究所、気象大学校、本庁からの指導官2人派遣を期待している。